

アルコール薬物問題 全国市民協会(ASK)代表

いまなり ともみ
今成 知美さん



56年生まれ。84年からASK代表。アルコール問題に関する情報提供、出版を行う一方、アルコール健康障害対策基本法制定も呼びかけている。＝松本敏之撮影

「女性とアルコール」というパンフレットを今年初めて作りました。この30年ほどの女性の飲酒率は高く、厚生労働省の統計によると2008年、20代前半では女性の飲酒率が男性を上回るという世界でも例のない状況になってしまいました。リスクを知ったうえで飲まない、とんでもない落とし穴に落ちることがある、そのことを知ってもらいたいと思ったからです。

女性の飲酒が増える背景には女性の社会進出もあるでしょうが、酒に強い女性が増えてはやされたり、かっこいいと思われたり、そんな風潮があると思います。酒類のCMでも、女性タレントを起用したり、甘めの製品が登場したり、女性がターゲットになっていることも大きいでしょう。

世界保健機関(WHO)によればアルコールを原因とする年間の死者は世界で250万人、大切なことは、その害は男女で大きく違うことです。

まず、女性は身体が小さいこともあって、男性よりはるかに少ない量の飲酒で肝臓を壊し、依存症になります。妊娠中や授乳中だと、胎児や乳児に深刻な障害を生じかねません。

さらに、依存症になった場合、女性の方がより深く傷つきます。主婦が依

飲める女 かっこいい?

平成25年(2013)5/22(水) 朝日新聞

く、離婚される率は女性の方がずっと高いのです。家族の恥と「座敷牢」に閉じ込められたりして、回復のための支援も得られにくいのが実情です。

大学時代、コンパの飲酒で仲間を亡くしました。飲みながら仕事をしている人を見てきましたし、20代の頃には私自身、よく飲んでいました。フリーライターとしてアルコール問題取材する中で、ASKの活動にかかわることになり、今はたまに飲むだけです。

もちろん、アルコールをすべて否定するわけではありません。徒然草にも「百薬の長」とあります。でも、続け「万の病は酒よりこそ起これ」とも吉田兼好は書いています。要はリスクを知って付き合うことです。

WHOは酒の販売や広告を規制する指針案を出し、各国の実情に応じて対策をとるよう求めています。多くの国ではすでに、広告などに何らかの規制があり、さらに強化する動きも出ています。酒をゴクゴクおいしそうに飲むCMが流れ、町に出れば飲み放題の広告。こんな国は珍しい。リスクを知って飲むのはいい。でも、飲むのを奨励したり、ましてや強制したりするような社会は変えるべきだと思います。

(聞き手・辻篤子)